

現代文化への反省

桐 谷 四 郎

信仰と知識の乖離は近代世界と共に始まる。ルネッサンスの精神は世界と人間の発見であったといわれるが、自由な批判精神をもって人間を開放したヒューマニズムは三百年を怪た今日において無信仰と物質の索莫とした世界を残すのみである。自由な批判精神、科学精神と理知はそれ自身高貴なものであるだろうが、それらの担い手であるヒューマニズムは、はたして人間の生き方に対して完全なものであるだろうか。この二十世紀の世界において最も問題となっているのは科学と信仰あるいは科学と詩の相克である。

詩は他の芸術と同じく魔術的世界観と共に始まりその消滅と共に終わろうとしている。英文学の歴史もある意味では両者の相克の歴史である。近代と共に始まった理知と感情、科学と詩の相克は西欧十八世紀の合理主義の勝利に終る。十八世紀の後半より十九世紀の初頭いわれるロマンティズムの文学はこの合理主義超克の文学であった。それは失われた人間本来の生き方を回復しようとする真摯な試みであった。端的に言えば、近代以前の魔術的世界観を回復しようとする試みであった。併しとうとうたる科学と物質文明の波は十九世紀を通じて詩人たちを押し流してしまふ。あの悲しくも美しいアーノルド (Matthew Arnold) の「ドーヴァの浜辺」は十九世紀知識人の苦悩をまざまざと語るものである。かつてこの現世の岸辺にひたひたと押しよせていた美しき信仰の波は今や冷き夜風に誘われて

現代文化への反省 (桐谷)

悲しくもはかなく退いていく。十九世紀末のあの耽美派の詩人たちの美しく孤独な幻想は索莫とした科学と物質文明の中にあつて人間本来の生き方、純粹性を求めたものであつた。二十世紀に入ると科学と詩、信仰の乖離はますます激しくなる。第一次大戦に前後する政治的、経済的事情によるあらゆる伝統、因習よりの開放は、所謂詩的なもの精神的なものをすべてを拒否しようとするものであつた。

このような事情に直面した今世紀の詩人たちの態度はどのようなものであつたか。まず今世紀前半の詩壇の大御所的存在であつたT・S・エリオットの場合を考えてみよう。エリオットの詩論の中心をなすと考えられる「思想の情緒的把握」とか「明晰な情緒」ということは上述したことに深く関係している。魔術的世界観と共に始まつた詩というものは、エリオットにあつても本来情緒的なものであるということは肯定せざるをえないだろう。しかし、この情緒的なものを失つてドライで知的な現代人の詩的好みはどのようなものであろうか。それは思想を理知的なものを歌いながらも詩本来の情緒的なことを忘れないことである。このような理知的な詩、明晰な意味を持った詩というのは、元来魔術的世界観と共に始まり呪文であり情緒的なものである詩の本質と矛盾することになる。エリオットは現代詩の難解性の問題を論じてこのことにふれている。それは詩の意味を余り重視するなということである。即ち詩における意味というものは読者の気持をそらし平静にするだけのものであつてその間に詩は本来の仕事をするという。たとえば、夜盗の類は常に番犬に与える好餌を用意しており巧みに犬を敬遠しながら本来の仕事にとりかかると同じであるという。また意味というものは詩よりもむしろ散文に属するものであるともいう。このエリオットの詩論における明晰な情緒、意味ということ、詩本来の情緒性、呪文、不透明という二元性なるものは正に現代詩人の苦悩を語ると共に、理知と感情、科学と詩の乖離を示すものである。

しかもエリオットにとっては詩人というものは何も真理を語るものでもなく、諷刺的なことを歌うものでもない。読者は詩人の歌うことを信ずる必要もない。詩人の使命はただ読者を喜ばせるだけであって詩とは何も仕事という程のことでもない。たしかに詩をつくるということは血をインクにかえる程の烈しい努力を必要とするものではあつても所詮それは「まぬけの遊び」(a mad's game)にすぎないと自嘲するのである。この絶望的な叫びこそ精神的な生きる基盤を失つた現代詩人の苦悩の声である。このことを書いたのは一九三三年であつたが、十年後には今世紀の画期的な宗教詩「四つの四重奏」を出版している。それは知識人がいかにして宗教的なものに接近するかということが考えたものであつた。それはある意味で科学と詩、理知と情緒の融合、一体化をエリオットは達成したということができる。また三十年代の詩人の一人であるC. Dayルイスの場合はどうであつたか。一九五一年出版の彼の選詩集の序文によれば、詩とは記憶、経験を調整してこれを我々が満足できるように解釈することであるという。我々は数々の経験をよりよく理解するために詩をかく。それは烈しい自己修練、克己である。この意味において、詩とは一つの聖なる使命であり、真理の探求でもある。この人間経験を再整理し再創造し解釈すること、そこに詩的真理が生れるのであるが、この詩的真理ということに関し詩人は読者と次の如き約束をしなければならないという。それは人生は究極においてある種の真理を含んでおり、その真理は詩という媒介によつてのみ、あるいは最も巧みに伝えることができるという約束である。更にいう。この約束は今日においてはきわめて困難なこともかもしれないが、詩が読者の同意をえて、たとえ一時間でも生の充実感を感じさせることができるならば、その約束は無意味なものではないという。ルイスは、理知と感情、科学と詩の乖離を痛感しながらも詩の優位、詩的真理の探求を強く主張してやまないのである。このようにして現代詩人たちはこれらの問題解決に対して真摯な努力を続けていると考えられるのであるが、S・

現代文化への反省（桐谷）

スペンダー（Stephen Spender）こそは現実に対する深き認識を失わずきわめて深き思索を以てこの問題に対決していると考えられる。リチャーズ（I. A. Richards）は情緒的感応という点において現代人は莖を取り去られたダリヤの花のようだと言っているのであるが、スペンダーは産業都市における現代人を山のようになだらかに沢山の仔を生む二十日ねずみにたとえている。現代人の生みおとしたその産業都市の現実とは人間の造ったものではあっても根源的な意味において人間ドラマの背景とはなりえない。逆にそれらは次第に成長して自己の機能によって動き出し人間の支配を超えることになる。それらの近代産業の山は遂には人間共の上にのしかかってくる。広く文明といわれるものは人間の生みおとしたものであり人間の想像力、inner vision がその母胎である。しかしこの人間の内的ビジョンから生れた現代の現実とは本来の意味において人間存在の基盤とはなりえず隔絶して遂には人間共を苦しめる。しかし近代以前においてはこの問題はどうかであったか。西洋中世においてはカソリックの權威がすべてに優先していた。人間の内的ビジョンはカソリックの世界であった。中世の人間の生んだ中世の文化は建築彫刻絵画詩すべてこの内的ビジョンにマッチしていた。換言すれば人間の内側が外部の現実を規制してゆくことができた。現代においては人間の生んだ文化が皮肉にも人間存在の基盤を危くしようとする。莖をもぎとられたダリヤのように人間精神は砂をかんで砂漠化する。その理由は何であろうか。人間が生んだ現代世界は究極的な意味において物質的功利的なものであり、そこに精神的なものを見出すことはできないということではないだろうか。人間の内的ビジョンと外部世界の相関関係の消滅ということが現代世界の悲劇なのである。シェリー（P. B. Shelley）が「詩とは非公認の立法者である」と叫んだのは、この失われた外部世界に対する規制力の挽回を叫んだのである。

この精神の優位の根底をゆすぶったのは十八世紀の産業革命とそれに伴う進歩の観念であった。これらのことは人

類に大いなる幸福をもたらすものであり、最大多数の最大幸福を約束するものではあったが不必要なもの一切を除去する傾向が生れた。不必要なものとはいふがそれは地上的物質的観点から見て不必要なものであって、人間の根源的生にとっては必要不可欠のものであった。それは精神的宗教的なもの美的なもの、過去をふりかえる心の余裕などであった。近代以前においてはこれらのものこそ人間の内なるビジョンとして外部世界を規制したものであったが、遂にこれらのものは副次的なものとして、背後にかくされてしまう。リチャーズのいう魔術的世界観は産業革命により決定的に功利主義世界観にとってかわられる。功利主義的物質主義的世界観こそスピリチュアルのものと対立するものであり、この対立こそ現代世界の悲劇の根源をなしている。この功利主義的世界観をもってすればスピリチュアルなものはそれ自身ユースレスなものでありこの対立は結局有用性と無用性の対立となる。現代世界において、有用性は常に優位にたっているが時には無用性が優位にたつことがある。我々が廃墟を見て美を感じその美が我々の心情をたかめるその瞬間少なくともその時、無用なものの精神的なものが有用なものの物質的なものに打ち勝ったのである。又この有用なものは生けるものの領域、肉体の領域におり、それは現在に属する。無用なものは死者の領域、魂の領域であり、それは過去に属する。しかし、この有用なものの無用なもの、あるいは現在過去未来なるものはしばしば外部世界の現実と表裏をなしている。たとえば美しき都市なるものはそれを使用する現在の住民のものであると共にこの都市を造った過去の住民のものであり、又生れくる子孫のものでもある。都市は生きている。ただ有用性のみのために改造につぐ改造をもって変貌を続けるならば、それは逆に死物と化するであらう。我々は常に過去と未来につながる聖なる関係にあることを意識しなければならない。

プラトウは魂は精神は常に知に憧れるというが、この場合の知は肉体的地上的な知ではなく形而上学的な知を意味

現代文化への反省（桐谷）

している。それは、いわば無用の知である。

老人はとるにたらぬもの

杖にすがったおんぼろの案山子だ。

もしも魂がそのおんぼろをよしとして

手を打ちかわし、声高く歌うことがなければ。……

W・B・イェイツのいうこの魂の叡知の無用性に目覚めなければならない。（一九八〇・一一・一二）

Bibliography

I. A Richards, Science and Poetry

T. S. Eliot, The Use of Poetry and the Use of Criticism

S. Spender, The Creative Element

The Making of a Poem